

# 山形県俳人協会報



## 新たな一歩

鈴木正子

新年度を迎え心機一転で活動を開始しようとした矢先、本年もやむなく新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、第四十五回通常総会は中止せざるを得なく、書面表決となつてしまいました。資料は会員全員に送付し、ハガキでの賛否の返答をお願いしました所、一号議案、二号議案、規約一部改正、役員改選など全て、過半数以上の賛同をいただき、全面可決となりましたことをご報告し、皆様の日頃のご協力とご支援に感謝申し上げる次第です。従いまして、僭越でありますがお長職を再任となりまして、伊藤寛、牧静、両副会長と伊藤ふみ幹事長と一丸となり、出来ることから誠意を持って会の発展に尽くす所存でございます。残すべきものは残し、継承するものを認識し任期まで務めて行かねばと心引き締めていきます。活き活きと、コロナ禍の中の新たな一歩を目指して行きたいと念じております。今の世の中いつどんなことが起きるか誰も知るよしはありませんが、健康と精神力を保ちながら、ここに松下幸之助氏の言葉に励まされています。「悲

第 87 号  
令和 4. 6. 20

山形県俳人協会

〒九九〇一四三三 山形市荒楯町二一六―二十六

伊藤 ふみ 方

〇三三―六四一―一〇〇

運と思われるも決して失望してはいけない。その日その日を必死で生き抜くことが大事。九十であるのが百であるのが生きていく間はやるべきことはやる。人間行き詰まるということはない。行き詰まるということは、自分が行き詰まったと思うだけのことである。」に頷いています。

また、コロナ禍に参ってしまっている中、ロシアのウクライナ侵攻や地震など、憂かないことが続き心痛みます。

どんな時でも俳人にはいつも自然の生き物が微笑んでくれます。対面での俳句会や吟行会なども通常に戻りつつ、明るさが見え嬉しい限りです。これからの県俳人協会の将来を模索し、俳壇の向上を目指し、会員の減少などは気がかりなことですが、まず、若手に種を蒔き、高齢者に繋ぐことの大切さ、また、俳句の基本を顧みることの重要さなど、定型を守り、単純、平明、的確を心掛け適切な季語を選ぶ力、自句を推敲する力、など改めて見直したいと思えます。歳時記を傍らに仲良くすることも大切。新版の角川俳句大歳時記には「東日本大震災」が季語に収録されたとありました。嫌な事はかりでなく、めでたいことも収録されることを願いたいものです。また、令和六年には、東北俳句大会・山形大会が予定されますが、早目の準備が必要となります。まだ、安心出来ない日々ですが、コロナ禍の収束や平和への願いを込めて、感染予防を怠ることなく、ご健吟をお祈り申し上げます。

# 第四十四回山形県新春俳句大会

とき 令和四年二月

## 入選作品

### 阿部 月山子 選

#### 当季雑詠の部

#### 特選

疫病も邪気も吞込む獅子頭

山形市 鈴木 実

#### 秀逸

水仙の揺るる岬の舟着場

山形市 横道輝久子

ふきよせの彩る茶菓子炉を開く

東根市 名和 則子

興行に揃ふ三日の能役者

鶴岡市 栗原 愛子

除雪車の運転助手や去年今年

鶴岡市 本間 まり

山の寺大地に届く大氷柱

天童市 岡田 久一

#### 佳作

小正月妻を連れ出す試着室

山形市 栗原ただし

肘折のさんげさんげの初湯かな

東根市 大江 洋子

#### 兼題の部 「梅」「薄氷」

#### 特選

龍神の棲む池とざす薄氷

鶴岡市 齋藤キミ子

#### 入選

庫裏の窓開けて梅見の日和かな

大石田町 斎藤 静子

川沿ひの漆器工房梅の里

鮭川村 小川 庭水

富士の嶺に朝日射しをり曾我梅林

東根市 門脇 好子

切り株の側の二代目梅ひらく

河北町 渡辺 洋子

船で行く島の宿なり梅真白

山形市 折原 廣子

薄氷を踏んで見上げる立石寺

東根市 大江 洋子

廃農に抗ひ続け林檎もぐ

上山市 石黒 正二

雲降る未完の像の磨崖仏

東根市 結城トミ子

屠蘇祝ふベトナムからの実習生

山形市 高橋 長丘

柚子湯の香纏ふ赤子の寝顔かな

鶴岡市 牧 静

寒行の白装束や連太鼓

東根市 斎藤耕次郎

寒満月たてよこなめ獣道

遊佐町 小松 恵子

鉦の音に初耀の値が走り出す

天童市 和島 繁

教会の庇に鳩も雪宿り

鶴岡市 池田 春斗

薄水のピンと張りたる水みくじ

山形市 小関 恵子

酒井家の四百年や梅蓄む

鶴岡市 本間 まり

竜住むちやう池の一面春水

鶴岡市 本間 まり

うすらひを砕きつつ待つ登校隊

遊佐町 小松 恵子

当季雑詠の部

特選

疫病も邪気も呑込む獅子頭

鈴木 実

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

龍神の棲む池とざす薄氷

齋藤キミ子

鈴木正子選

当季雑詠の部

特選

大どんど成就の達磨立ち上がる

鶴岡市 牧 静

秀逸

鳥海山の稜線海へ寒梅忌

遊佐町 鈴木 陽子

佳作

水仙の揺るる岬の舟着場

山形市 横道輝久子

興行に揃ふ三日の能役者

鶴岡市 栗原 愛子

胸中に踏ん切りつける根雪かな

東根市 阿部美和子

いち早くまとふマネキン春の服

朝日町 峯田 今子

工房を洩るる機音ささめ雪

山形市 伊藤 厚子

夕星のまほろばの塔淑気満つ

山形市 井上多桂子

父祖よりの口伝もあらず寒鴉

山形市 伊藤 ふみ

除雪車の胴震はせる曲り角

山形市 横道 啓一

暁の蔵王銀嶺淑気満つ

山形市 木嶋 玲子

鉦の音に初糶の値が走り出す

天童市 和島 繁

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

薄氷の動けば空は縹色

鶴岡市 木村 慶子

入選

薄氷を踏みて転校打ち明ける

天童市 川崎 典子

早梅や路地の奥なる屋敷神

天童市 野村 貞子

正面の白梅眺め列車待つ

大石田町 柏倉ヤス子

梅一枝妻に手向けて一人なり

山市 木村比紗子

当季雑詠の部

コンサート並ぶ少女や梅ふふむ  
 船で行く島の宿なり梅真白  
 草咬みて岸を放れず薄氷  
 薄氷をばりばり踏む子悪女めく  
 梅真白長子の婚のととのへり  
 薄氷のピンと張りたる水みくじ

村山市 小室けい子  
 山形市 折原 廣子  
 米沢市 小島 緑泉  
 酒田市 菊地 秀雄  
 東根市 大江 洋子  
 山形市 小関 恵子

梅一枝妻に手向けて一人なり  
 コンサート並ぶ少女や梅ふふむ

木村比紗子  
 小室けい子

黒坂重政 選

特選

大んど成就の達磨立ち上がる

牧 静

特選

除夜の鐘一打一響会者定離

山形市 庄司 芳彦

秀逸

鳥海山の稜線海へ寒梅忌  
 日常の母にそっくりおかめつけ  
 お降りや屈んで潜る石鳥居  
 出初式機影はるかに光りをり  
 初観音板戸埋めたる千社札

鈴木 陽子  
 富樫 正義  
 齋藤 真人  
 高橋 長丘  
 柏倉ヤス子

秀逸

来世とはこんなものかも日向ぼこ  
 興行に揃ふ三日の能役者  
 長旅の護符に富山の風邪薬  
 ふるさとを思ひおこすや虎落笛  
 卒寿てふ身の置きどころ去年今年

東根市 菊地みさ子  
 鶴岡市 栗原 愛子  
 山形市 武田 菜美  
 山形市 近藤 寛治  
 米沢市 結城 芳理

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

薄氷の動けば空は縹色

木村 慶子

入選

薄氷を踏みて転校打ち明ける  
 正面の白梅眺め列車待つ

川崎 典子  
 柏倉ヤス子

佳作

初夢やふはり乗り込む宇宙船  
 迷ひたる袋小路の雪女  
 秒針のカチツと動き去年今年  
 風花や消えゆくものの美しく  
 青き空海にも見えし寒日和  
 鳥海山に片脚かけて冬の虹  
 歳時記の使ひ古びて冬深し

山形市 栗原ただし  
 山市 北澤 和美  
 遊佐町 青葉 信子  
 山形市 小野 誠一  
 山形市 秋元 啓子  
 酒田市 加藤 悟  
 天童市 伊藤 数子

書初やいつも変はらぬ師の hands  
 両膝に両手を挟む寒さかな  
 万葉歌はらひ伸びやか筆はじめ

山形市 鈴木 実  
 山形市 大井田千代子  
 山形市 武田志摩子

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

酒井家の四百年や梅蕾む

鶴岡市 本間 まり

入選

薄氷を踏みて転校打ち明ける  
 薄氷を渡りこけたる鴉かな  
 梅の香や音頭の町の師弟句碑  
 梅白し共に老い行く余生かな  
 薄氷を踏むひと足をためらひぬ  
 梅の花米寿の母の手のぬくし  
 梅真白長子の婚のとのへり  
 薄氷に響く鼓や能舞台  
 北国の梅ゆつくりと開きけり  
 白梅や思ひ念ずることひとつ

天童市 川崎 典子  
 山形市 渡辺 幸則  
 山形市 小野 誠一  
 天童市 佐藤 稔  
 山形市 折原 廣子  
 山形市 齋藤 真人  
 東根市 大江 洋子  
 鶴岡市 佐藤 恭  
 庄内町 齋藤八重子  
 米沢市 猪俣 洋子

当季雑詠の部

特選

除夜の鐘一打一響会者定離

庄司 芳彦

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

酒井家の四百年や梅蕾む

本間 まり

伊藤 寛選

当季雑詠の部

特選

鳥海山の稜線海へ寒梅忌

遊佐町 鈴木 陽子

秀逸

びゆうびゆうと夢の中まで吹雪けり  
 埋もれてゐぬかと友の初電話  
 こなからの酒熱くしてお元日  
 蒸躰美しく箸使ひたる  
 鶏日やかいがらばねを開く息

米沢市 小島 緑泉  
 山形市 大森 アキ  
 西川町 坂坂 歩牛  
 東根市 伊藤 幸  
 山形市 横田キミエ

佳作

凍星のひとつに宇宙ステーション  
 洗はれて白菜次々尻揃ひ  
 船腹にアラビアの文字初荷船  
 掌の錠剤のつや寒に入る  
 あらたまの年や除雪の音に開け

山形市 伊藤 厚子  
 新庄市 上野 直樹  
 山形市 金谷ゆかり  
 大江町 安藤 桂花  
 山形市 伊藤 ふみ

子に送る正月用の餅その他  
友達の冬至南瓜と味くらべ

酒田市 須階 米子  
山形市 笹原 茂

熊の皮座つてみたき横座かな

東根市 名和 輝男

工事場の声の大きな初仕事

山形市 鈴木 実

松二本抱へて帰る年の市

山形市 岸 桃魚

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

紅梅や真白き富士をまなかひに

山形市 岸 桃魚

入選

出稼ぎの父待つ野良の薄氷

東根市 阿部美和子

薄氷の動けば空は標色

鶴岡市 木村 慶子

早梅や路地の奥なる屋敷神

天童市 野村 貞子

パリパリと折れてわくわく春水

東根市 土田 薫

薄氷を踏みてバス待つ最後尾

山形市 伊藤 ふみ

薄氷を突き割りたる鯉の口

西川町 板坂 歩牛

乙女らの笑ひ弾ける梅見茶屋

東根市 結城トミ子

梅の花米寿の母の手のぬくし

山形市 齋藤 真人

薄氷に響く鼓や能舞台

鶴岡市 佐藤 恭

白梅の塵ひとつなき床飾り

山形市 阿部 柗太

当季雑詠の部

特選

鳥海山の稜線海へ寒梅忌

鈴木 陽子

秀逸

びゅうびゅうと夢の中まで吹雪けり

小島 緑泉

埋もれてぬか友の初電話

大森 アキ

こなからの酒熱くしてお元日

板坂 歩牛

蒸饅美しく箸使ひたる

伊藤 幸

鶏日やかいがらばねを開く息

横田キミエ

兼題の部 「梅」「薄氷」

特選

紅梅や真白き富士をまなかひに

岸 桃魚

# 令和三年 山形県俳人協会賞 準賞 句集『舟唄』伊藤 啓泉

## 山形県俳人協会賞選考経過

選考委員 伊藤 ふみ

令和三年度の山形県俳人協会賞はコロナの感染状況を鑑みて選考委員会の開催を取りやめた。選考委員が選考対象句集について、県俳人協会独自の評価表と推薦書を作成したのは例年通り。各委員の推薦書などを伊藤寛選考委員長代理が取りまとめ全員に返送し、電話でそれぞれの委員の意見を確かめるなどして選考を集約した。鈴木正子会長の意見を入れた選考結果を再度各委員に電話で連絡して委員会としての決定をするという念の入った選考手続きとなった。

委員長代理の伊藤寛、委員の岸桃魚、工藤稲邨、伊藤ふみの四名が選考にあたり、鈴木正子会長がオブザーバーとして意見を述べた。

今年の選考対象句集は前年と同じ二編。令和三年四月発行の伊藤啓泉「舟唄」、同七月発行の横道輝久子、横道啓一「からし種」であった。

「舟唄」は平成十四年から三十年までの作品をまとめた句集。章の名前に工夫があり、添えられた写真にも趣があった。最上川や月山を身近にした暮らしを、ベテランらしく丁寧に詠んだ句集。ユーモアもあり全体的に好印象で、協会賞に推

す委員もいたが、合議の結果準賞となった。

選考委員の感銘句

春の雪どつさり降って計報くる

啓泉

老牛の反芻して終戦日

啓泉

月山の裾まくりあげ山笑ふ

啓泉

一つ食べ一つ供へる柏餅

啓泉

「からし種」は夫妻の平成十七年から三十年までの作品をまとめた二人句集。信仰を共にする二人の穏やかな信頼関係がうかがえる一冊である。タイトルのつけ方や口絵の墨絵など丁寧な編まれた句集であった。しかし、個性・作風の違う二人の作品をまとめた一冊を、賞の対象にするのは無理があるとの意見の選考委員もいた。

選考委員の感銘句

古稀なれど桃の苗木を植ゑにけり

啓一

繭玉に赤子の拳ひらきけり

啓一

からし種ほどの信仰耕せり

輝久子

かくれんぼみなこすもすとなりけり

輝久子

今回の判定はやや辛めだったように思う。どちらの句集も、読みごたえがあり、読後さわやか。郷土や家族への愛と感謝を感じる好ましい句集であった。選考委員一同、コロナ禍の中で前向きに取り組まれた三人に敬意を表したい。

# 山形県俳人協会準賞を受賞して

伊藤 啓泉

この度計らずも山形県俳人協会準賞の受賞の荣誉に浴し正直のところ戸惑っておりますが、有り難く拝受致します。

私の句集「舟唄」については、初めてのことなので「胡桃」の鈴木主宰はじめ多くの方々からのご協力を頂き、この場をお借りして改めて、お礼を申し上げます。

しかし、俳句を作り始めてから今日まで句集に載らない句を駄句を含め沢山作っておりますので、その中にこそ自分の俳句人生があるように思っています。平成二十六年十二月一日付けの読売俳壇に正木ゆう子選になった句

コンビニの灯りたのもし秋の暮

「初めてコンビニを利用してから四十年近い。何時どんな場合にもなんとかなる便利さは誰もが経験しているだろう。一句では「便利」が「たのもし」に出世している」との評でした。俳句は日常生活の四季折々の中から生れるもので、日記を記す如く無限であると思います。私の余生はあと何年あるかわかりませんが、残された人生を俳句と共に生きて行きたいと思っております。  
これからも微力ではありますが、俳句の発展普及に努めて参りたいと思っております。

## 第三回山形県 20句競詠俳句賞入選

大賞	水の里	木村 慶子
優秀賞	紅の花	伊藤 厚子
〃	端午の空	牧 静
入賞	昭和の残像	石井 浩吉
〃	高野行	佐治よし子
〃	さばね峠	中鉢 時雨
〃	春隣	栗原ただし
〃	花鋏	鈴木 あい
〃	季の移ろひ	折原 廣子
〃	夏の立山	横道輝久子
〃	自肅とは	木村比紗子
〃	最上川	猪股とみを
〃	60's 高校時代	小島 緑泉



# 第三回山形県20句競詠俳句賞

大賞 「水の里」 木村 慶子  
 優秀賞 「紅の花」 伊藤 厚子  
 優秀賞 「端午の空」 牧 静

## 第三回20句競詠俳句賞の選考を終えて

選考委員長 伊藤 寛

第三回は四十一編の応募がありました。選考方法は各選者が上位十編を選び点盛りし、その合計点により順位を決めました。

大賞に木村慶子さんの「水の里」が、優秀賞に伊藤厚子さんの「紅の花」と牧静さんの「端午の空」が決まり、つづく十編を入選としました。

本賞の応募者全員に、上位三十編をまとめた作品集と各選者の選評、参加賞を送り、大賞・優秀賞・入選の皆様には賞状と賞品を同封し、表彰に代えました。

後日、応募者から筆者に届いた手紙の中から一部を要約して紹介します。

「20句競詠は大変良い企画だと思う。20句をまとめて発表することで大変手応えのある勉強ができた。これからも新しい俳句をめざしたい。」

ここに書かれた「新しい俳句をめざしたい」は俳句を志す人、俳句をつづけて行こうとする人にとってとても大事なことなので忘れないようにしたいものです。

さて、20句の作り方にはいろいろあります。①四季を通して詠む②ある季節を詠む③ある事柄を詠むなどです。

応募作品には①が圧倒的に多いのですが、四つの季節を網

羅することにより、こだわらないほうがよいように感じました。こだわりがあると、俳句の世界を狭くしてしまうからです。

作り方の一例を上げれば、吟行に行つたときにできた5、10句を核に据えて、それに日常の句を加えて20句にまとめる。

この③の方法はもつと試されてもよいと思いました。

今回応募を見送られた方々には、次回は是非参加していただき、日頃の勉強の成果を披露していただきたいと思ひます。

この賞にチャレンジすることで、これまで以上に手応えのある勉強ができ、俳句に対する理解が深まることと信じています。

結びに、惜しくも入選を逃した作品の中から、感銘を受けた句を一句ずつ上げて総評とします。

- 十八才媪二人の南瓜売り 「発句探訪」
- さくさくと柔き鎌音春の庭 「季の音」
- 旅先の湯船に掬ふ冬紅葉 「中辺路」
- 風通る棹重たげに柿暖簾 「吊し柿」
- リハビリの長き廊下や笹飾り 「福寿草」
- 大空の果てまで続く蕎麦の花 「花園」
- 十葉の土瓶の底の渋みかな 「白い柀」
- 久に会ふ子の背見あぐる大晦日 「祝日」
- 差し傘の三山詣霧時雨 「丑年縁年」
- いづこにも初夏の花々咲く平和 「夜桜」
- 社殿にて御札作りや冬ざるる 「一喜一憂」

## 大賞

## 水の里

木村 慶子

雪代を飲んで大瀨最上川  
合祭殿ひねもす雪解雫かな  
桑ほどく蚕室確と松ヶ岡  
月山の水を遊ばせ葦の角  
まんさくや峡の目覚めのゆるゆると  
柚が家に春の獅子舞来てゐたり  
水口の幣新しき逆さ牛  
百年の水口守り稲の花  
ふるさとは水の里なり胡瓜食む  
箱眼鏡がき大将を追ひかけて  
弁慶に鱒目を剥く五六ぴき  
仏法僧鳴くや参道水碓  
上り来て齋庭にすする心太  
神の水賜はる里や稲穂波  
山の水引いて二代目走り蕎麦  
池普請鯉の太さを囃したり  
背に金幣丑年暮るる羽黒山  
塩もだし寒九の水にかさ開く  
初春の水辺の館探鳥会  
ポプコーン爆せて笑つて春隣

## 水の里に暮らして

木村 慶子

大賞という身に余る賞を賜り、大変感激しております。  
水にまつわる思い出は、子どもの頃に溯る。山里の生家裏  
の清水が原点。砂を巻き上げて湧く水場に小魚が群れ、夏は  
胡瓜やトマトが冷えていた。飽かず眺めていた記憶がある。  
庭先の堀に入って、友だちもろとも叱られたことも。きつと  
水深があったのだろう。半べその顔がアルバムに残っている。  
箱眼鏡で川底を覗いた時のわくわく感も忘れ難い。

最近に歳時記で、子どもの頃を追体験する楽しみが増えた。  
歳時記はまた、新しい学びを教える。米作りに関わる季語  
が並ぶ中に、「水喧嘩」「水争」「水盗む」など水をめぐる一  
連の騒動が混じっているのだ。調べると水不足が発端。米の  
増産に必要な水不足を解消するため、最上川、赤川から水を  
引く難工事が江戸時代から行なわれていたという。長年の労  
苦を忘れず堰に名を止めている（北楯大堰、因幡堰）その後  
の先人の努力で庄内平野の隅隅まで水路が巡り、水の里へと  
変わってきたのだ。同時に新田開発が進み、集落の名前に開  
発の歴史を知ることができるようになった。水は現在、大規  
模に管理され、水争いは減ったらしい。

「出水」「台風」など自然災害を乗り越えた一面の「稲穂波」  
を目にすると、庄内に生まれてよかった……と心底思う。水  
に生かされ、営々とくらしを紡いできた先人たち。山に水に  
畏敬の念を持ち、祈りを欠かさない。私もその一人になりた  
いものだ。

庄内平野は今、「田植え」直前の水鏡の時季、鳥海山も月  
山もゆるがない。歳時記を友にして今後学んでいきたい。

## 優秀賞

## 紅の花

廻船の絵図に佇む春シヨール  
舟運の紅衣古りず享保雛  
振袖の紅花染や夢見月  
永日の紅花絵巻目に辿る  
紅花や筆勢強き農日記  
畑中に摘ませてもらふ紅の花  
大策の重きに笑まふ汗の顔  
ただきぬ紅花入りの握り飯  
紅餅の乾ける筵涼新た  
納屋奥の天秤の塵ちちる虫  
陵王の装束紅し秋祭  
秋深し葉味簞笥に紅乾ぶ  
浮世絵のくれなる色を聴く炉端  
紅猪口を見せていただく冬座敷  
寒暁や染場に響く水の音  
紅餅をほぐす染師の息白し  
寒水のくれなる色に絹揉めり  
やはらかき眼の染師寒燈下  
モノクロの先代の笑み日脚伸ぶ  
本紅の色合ひ揃ふ春隣

伊藤 厚子

## 第三回山形県二十句競詠俳句賞

伊藤 厚子

優秀賞という身に余る賞を賜り、御礼申し上げます。

「紅の花」を見つめ、考察し、句作に至るまで、力となつた三つのことを、今振り返っています。

一つ目は、県立博物館企画展「紅と藍」や、紅花資料館の実物を通して、山形と紅花との関わりを歴史的にも学べたということです。

二つ目は、米沢市の紅花染め工房の、ある御夫婦との出会いです。紅花染めの様々な作品を見せていただいたり、お話を伺ったりする貴重な時に恵まれました。とりわけ、玉虫色の紅猪口や、本紅の色彩の美しさには、目を見張るものがあります。

「本物の美しい色を求めて、小寒の暁闇から紅花染めの仕事を仕込み始める。」というお話には驚きました。鮮やかな美しい色を生むためには、冷たい水が必要なのだそうです。柔らかな口調の陰に、人知れぬ努力と執念があることに、心打たれるものがありました。

思い出す度、感謝の思いが込み上げてきます。

三つ目は、季語との出会いです。「夢見月」という季語を歳時記で発見した時の驚きと喜び。「こんなに美しい季語がある。」「歳時記には、まだ私が知らない素敵な季語が、眠っているに違いない。」「そんな季語を発見したい。」「そう思うとわくわくして来ます。

この二十句の試みは、大変楽しく貴重なものとなりました。

## 優秀賞

## 端午の空

産声は寒気を散らすひかりかな  
 おはようと校門前の白い息  
 少年の声裏返る雪歌舞伎  
 児ら作る母似の顔の紙雛  
 子の息や空を映してしゃぼん玉  
 よちよちと手のひらひらと青き踏む  
 ぶらんこの少年宙に届くまで  
 風船を持つたまま寝る子の重さ  
 ブック靴五足端午の空に乾す  
 村にまた一尾の増えて鯉のほり  
 子の描く日焼の父の巨きな手  
 たまゆらの赤子の寝息さくらんぼ  
 裸子の蛇口の水の虜なり  
 白桃や嬰の手首のくびれをり  
 空蟬を胸に飾つて下校の子  
 熱闘の後は爽やかグータッチ  
 揚花火特等席の肩車  
 子らの去り声に火の点く蟬しぐれ  
 初雪を踏むにためらふ嬰の靴  
 炬話を囲む小さき膝小僧

牧 静

## 端午の空

牧 静

この度の作品は、子供を中心に詠みました。十年ほど前には実家が大家族で、盆や正月やお祭りや法事などイベントがある度に、大勢の子供たちが集まります。

ブック靴五足端午の空に乾す

みどり児の眠りを移す夏座敷

また、前に住んでいた家は小学校のグラウンドの真ん前でした。学校の児童たちの行動を、毎日観察していました。グラウンドに並ぶ桜の幹に蟬がいつぱい鳴いていました。

子らの去り声に火の点く蟬しぐれ

裸子の蛇口の水の虜なり

現在は我家の前に朝、子供たちが集まり、上級生を先頭に一年生を守るように登校します。

空蟬を胸に飾つて下校の子

新しい町の住民も若く、アパート・マンションが多くあります。向いの家の女の子は、玩具や衣服、三輪車など、なかでも入学のお祝いに赤いランドセルを買って貰ったのがうれしくて、空のランドセルに絵本を入れて、かたかたの音と共に何度か見せに來ました。

辛夷の芽かたかたと鳴るランドセル

県俳人協会二十句競詠の高点の選をいただき有りがとうございしました。なお、一層の体験を積み秀句を詠むことに努力をしたいと思います。

山形県俳人協会の、ますますの御盛況を祈念します。